算数の問題と現実

算数の時間の文章問題を解く時に、私は、すんなりと式を立てて計算することができない子どもでした。例えば、「クッキーが１３個あります。４人で同じ数ずつ分けたら、１人何個になり、何個あまりますか。」という問題があったとします。詫間小学校の子どもたちなら、１３÷４＝３あまり１と、式を立てて計算し、答えは１人３個で、１個あまるとすんなり計算できることでしょう。しかし、子どもの頃の私は、「あまったクッキーは、どうなるのだろう？」ということが気になって気になって仕方ありませんでした。「そもそも、クッキーがあまることなんてあり得ない。早い者勝ちか、じゃんけんで決めるだろう！」と、現実の世界を思い出して、なかなか式が立てられませんでした。そんな思いを先生に話すと、「これは算数なのだから、あまっていいの。」と言われ、「そうか、算数の世界は、実際の世界とは違うのだ。」と思い、ようやく式を書いて計算を始めるといったことがありました。自分の頭の中では、１３という数字ではなく、「おいしそうなクッキーが１３個目の前に並んでいた」のです。それを算数セットのブロックのように「□が１３個」とは、なかなか考えることができなかったのです。

ところが、高学年になって、同じような問題が出たことがありました。「クッキーが１３個あります。４人で同じ数ずつ分けたら、１人何個になりますか。」という問題を、分数で解く授業でした。１３÷４＝13/4＝３と 1/4。つまり１人まるまる３個と、１個の４分の１ということになります。この問題を見た時に、私は、算数はすごいと思いました。まさに算数の世界も実際の世界も同じだ、しかも、公平だと感じたのです。早い者勝ちかじゃんけんでは、１人だけいい思いをしますが、残りの３人はくやしい気持ちになります。ところが、残った１個を４つに割って１つずつ取れば、全員が公平にクッキーを食べることができます。「算数とは、公平に考えることができるお勉強なのだ！」と思いました。

また、こんなこともありました。７と５を使って、引き算の問題を作った時のことです。詫間小学校の子どもたちなら「まんじゅうが７個あります。５個食べたら残りは何個になりますか。」という問題や、「さとしさんは、鉛筆を７本買いました。よしえさんは、鉛筆を５本買いました。どちらが何本多く鉛筆を買いましたか？」のような問題をすんなりと作ることでしょうね。私は、けっこうな時間考えたすえ、「ぼくは、カードを５枚持っています。ひろき君が、７枚カードをほしいとたのんできたので、ぼくはカードをひろきくんにあげました。ぼくは、今、何枚カードを持っていますか。」という問題を作りました。この問題、解けませんよね。そうです。その時も、友だちや先生から、「７－５はできるが、５－７はできません。」とか、「カードを５枚しか持ってないのに７枚あげることはできません。」とか、「何枚ひろき君にあげたのか分からないので解くことができません。」とかと集中攻撃されました。でも、これ、その問題を作る前の日に本当にあった話なのです。ひろき君（現在高等学校の校長先生）の家で遊んでいたら、仮面ライダーか何かのカードの話になって、「ひろき君は何のカードがほしいの？」「○と△と□の３枚はぜったいにほしいなあ。できたら、◇と●と▲と◆の４枚もほしいな。７枚、今ほしいかな。よしき君は、今、何枚カード持ってる？」「ぼくは今５枚持ってるよ。◇と●と▲と◆と○。」「へえ、いいなあ。」「じゃあ、この５枚、全部ひろき君にあげるよ。」「えーっ、いいよ。それはわるいよ。」「いいよ。この前、ひろき君、銀玉鉄砲をぼくにくれたでしょ。そのお礼だよ。」「ほんと？いいの。ありがとう。」ということですから、現実を式に表したら５―５＝０ということになります。でも、実際にあったことは５―７（５枚しか持っていないのに７枚ほしいと言われた）で、５－７はできないので５－５＝０になってしまったということです。

しかし、中学校の数学では、この現実も５―７＝－２（マイナス２）と、見事に式に表すことができたのです。まさに、「５枚しか持っていないのに７枚ほしいと言われた」ということを式に表すことができたのです。算数・数学ってすごいなあ！と心から思いました。しかし、このような私の頭の構造ですので、「国語が得意で算数は苦手」な中高校生に成長していきました。

一度も見に行かなかった娘のマラソン大会

私は、走るのが得意な子どもでしたので、小学校の時のマラソン大会はとても楽しみでした。そして、だいたい、いつも１位か２位でした。１位の時は、ゴールした後で、苦しそうな顔をして走っている友達の姿もろくに見ず、「まあ、こんなもんだな。」みたいな涼しい顔をして、自己満足の世界にひたっていたと思います。２位の時は、「今日は、足が痛かったからな。」と、悔しさをかくして、自分自身に言い訳をしていたと思います。あまり感じのいい子どもではなかったと思います。

かなり昔の事ですが、マラソン大会が終わった後に、先生からチョコレートをいただけたので、その甘さだけは、しっかりと頭に残っています。マラソン大会＝チョコレートという印象です。

一方、私の娘は運動が苦手で、小学生の頃、陸上大会や水泳大会はもとより、運動会でも活躍している姿を見ることはありませんでした。特にマラソンは大の苦手でした。呼吸器の持病があることもその原因の一つです。それに加えて走ること自体があまり得意ではなかったものですから、娘にとって、マラソンは苦痛以外の何ものでもなかったと思います。

マラソン大会が近づくと、なぜか（当然かもしれませんが）持病が悪化し、「マラソン大会、憎し！マラソン大会なんかなければいいのに。」と、娘は、一人でよく怒っていたものです。

それでも、娘は、マラソン大会を休むことはありませんでした。「マラソン大会は絶対見に来たらいかん！」と言いますし、成績も聞きはしませんでしたので、娘が何位だったのかは、はっきりとは知りませんでした。多分、最後から１番目か２番目だったと思います。

でも、私は自分の娘（今から十数年前の）は立派だと思っています。それは、娘なりに努力をしていたからです。運動が苦手な娘は、例えば、体育でハードル走をすると聞くと、段ボールでハードルのような物を作って、家の庭に並べて一人で練習していたのです。苦手なマラソンに向けても、夕方、家の周りを走っている姿を何回も見たことがあります。娘は、娘なりに考えてがんばっていたのです。そして、結果もしっかりと受けとめて、言い訳などは全くしませんでした。

私は、運動が得意でしたので、何の努力もせずに１位か２位でした。娘は、これだけ努力しても最後から１番目か２番目でした。もちろん、トップ争いをする者にだって、それなりに悩みも苦労もあります。自分で意識していないだけで、やはりどこかで努力もしていたことでしょう。ですから、どちらが立派とか立派でないとかではなく、一生懸命に取り組んだ全員が、間違いなく立派なのだと思います。マラソンが得意な子も苦手な子も、思ったような結果が出せなかった子も、思った以上に結果がよかった子も、体調が万全だった子も、そうでなかった子も、結果を受け入れられた子も、悔しくて結果を直視できなかった子も、今日の最高の頑張りができたなら、みんな立派なのです。そして、それは、いつの日か、必ず素晴らしい経験へと変わっていくのです。

今日、一生懸命に走っている詫間小学校の子どもたちの姿を見ながら、その姿を応援している保護者の皆様の姿を見ながら、もし、自分の娘が、１位か２位になりそうなくらい走るのが速かったら、私は仕事を休んで応援に行ったのだろうか、いや、行かなかったのだろうかと考えていました。

そして、あの時、やっぱりマラソン大会で走っている娘の姿を一度でもいいから見ておくべきだったと思いました。

ひな壇を出す時期が近づきました

ひな祭りなんて、まだまだ先の話だよなと思っていましたが、節分を過ぎたら「ひな壇」を出すご家庭も多いようなので、後２週間くらいなのですね。我が家でも、節分を過ぎたら、そろそろと、土日を使ってひな壇を出しています。

私には４歳年上の姉がいましたが、昔、我が家には「ひな壇・ひな人形」はありませんでした。というか、「ひな祭り」さえもした記憶がありません。同級生の女の子たちの家で、ひな壇を出しているという情報も入ってこなかったし、その話題すら学校で出ることもなかったので、一般的な家庭に「ひな壇」はないものだと思っていました。うちの家だけ、ひな壇がなかったのかについてはよく分かりません。とにかく、ひな祭りのイメージは、本やテレビ、歌（灯りをつけましょ、ぼんぼりに…）の世界のことであり、我が家には遠い存在であったことは間違いありません。特に、歌の歌詞の意味はさっぱり分かりませんでした。「５人囃子（ばやし）の笛太鼓（ふえたいこ）…なんじゃそれ？？？　５人（で）林（が）増えた、行こう？？？」といった感じです。

それが、30 年くらい前に結婚した時に一変しました。妻の実家には、何と「ひな壇」があったのです。しかも７段もの階段になっている物です。それを持ってきたのです。結婚当時は、せまいマンションに住んでいましたので、こんなに大きい物を飾る場所がないと悩んだものでした。しかし、大きな箱に入った数多くの人形たちを見て、その美しさに驚きました。着物は立派、表情もすごくいい、指先まで緻密な細工がしてあるなど、想像した「人形」とは程遠い素晴らしさでした。それに、金屏風とか鏡とかの家具、ひし餅、牛車とかいろいろな物がそろっていました。購入してから何十年も経っているとのことでしたが、とても美しい状態でした。

その時から、なぜか、私がひな壇を出す係となりました。娘が幼い頃は、娘と一緒に写真を見ながら「灯りをつけましょ、ぼんぼりに…」と歌いながら、「これはどこに置くのかな？」と飾っていたものですが、いつの間にか、私が作業する割合がだんだんと増えていき、今となっては、出すのもしまうのも、私一人の孤独な仕事となってしまいました。しかし、毎年、毎年、同じ作業をしていくうちに、それぞれの人物の持ち物や位置などを完全に覚えてしまいました。ですから、出し入れの時間も、だんだんと短くてすむようになったのです。

今、娘は愛媛県で仕事をしていますので、毎週、週末に家に帰ってきますが、全国どこに転勤するか分からない職場です。就職して２年経ちましたので、この春には転勤するそうです。場所によっては、そんなにちょくちょくは帰ってくることができないかもしれません。もしかしたら、ひな壇を出すのも、今年が一つの区切りとなってしまうかもしれません。ですから、今年は、節分がすんだらすぐに飾ろうと思っています。娘が結婚したら、このひな壇も一緒に行くのでしょうか。

この前、ひな壇の前に、ひな壇の半分くらいの背の娘が立って、写真を撮ったと思っていたのに、あっという間に二十数年が過ぎてしまいました。

50年前の「50年後の未来予想図を描く」図工の作品

詫間小学校の皆さんは、学校で描いた絵や工作、習字などの作品をお家に持って帰った後、それをどうしていますか？私の娘が描いた作品や工作は、何と、そのまま倉庫の中に置いてあります。

私の父が塾をしようと駐車場の２階に教室のような大きな部屋を作っていたのですが、結局、塾はせずに広い倉庫となってしまいました。その場所がなければ、当然、娘の作品を家に置いておくスペースなどありませんでした。昔と違って、今は、デジタルカメラで撮影して保存ということが簡単にできますので、作品をデジタル画像にして残しているというご家庭も多いのではないでしょうか。昔の写真のようにアルバムもいりませんし、劣化もしませんからね。

私の子どもの頃の作品は、もちろん一つも残っていません。正直、自分が子どもの頃に作った作品を見たいと思ったことは、ほとんどありませんでした。うちの娘も、倉庫に行って昔作った自分の作品を懐かしそうに見ているという姿を、私は一度も見たことがありません。ですが、もし、昔の自分の作品を見ることができるなら、見てみたい物が一つあります。それは、私が小学校の３年生か４年生の頃、１０歳くらいの頃の図工の時間に描いた「５０年後の未来」の絵です。５０年後ですから、１０歳の子どもが６０歳になった時、つまり、還暦を迎えた時の未来予想図を描くのです。まさに今ではありませんか。

さて、その時代に１０歳だった私が、どんな未来を予想したのかは、今から５０年前がどんな世界であったのかを説明しなければなかなか分かってもらえないと思います。

スマホはありません。携帯もありません。電話も私の家にはありません。高瀬の町内だけで使える有線（受話器を上げると交換手という人が何番ですかと聞いて、かけたい家の番号を言うとつないでくれる）だけでした。私の家の周りは全て田んぼです。エアコンはありません。ファンヒーターもありません。夏は、扇風機のみ。冬は、石油ストーブ１個と後は「れんたん」（炭火のようなもの）だけです。自動車は、そうとうお金持ちの家にしかありません。家には、「バタ」と呼ばれていたオートバイ１台と自転車が１台だけでした。テレビは、白黒テレビが１台。ジュースは、飲んだことがめったにありません。風呂は、まきを燃やしてたいていました。だから私はいまだに「ふろをたく。」と言います。・・・という時代から、急速に高度経済成長の時代に突入していた時です。あっという間に、夢の超特急、新幹線が岡山まで開通したり、カラーテレビが普及したり、各家庭に電話が引かれたり。あの家も、この家も冷凍庫のある冷蔵庫を買ったり、何と自動車（夢のマイカー）を手に入れたり・・・。ですから、当時の担任の先生も、この先、日本がどんどん発展して便利になる時代を、子どもたちに想像してもらおうと、この授業を仕組んだのだと思います。

実は、何を描いたのか覚えていません。ですから、今、見てみたいのです。少しだけ覚えているのは、私の家の周りには、家が建ち並んで、それぞれの家に自動車があって、しかも運転はロボットがする。立体的な道路ができて、みんながヘッドフォンみたいなのをつけて電話していることです。これは、見事に予想が的中していますね。田んぼの中の一軒家だった私の家の周りは新しい家が建ち並んでいます。「コモンズみとよ」という新しい自治会ができたくらいです。何十軒も、次々と田んぼが住宅に変わっていきました。携帯電話は、ほとんどの人が持っています。高速道路もできています。ロボットではないかもしれませんが、自動運転技術もどんどん進化しています。鳥坂にもインターチェンジができました。でも、その他に、どんな予想をしていたのかが、どうしても思い出せないのです。ですから、見てみたいのです。私は、図工で絵を描くのは好きではなかったのですが、この絵に限っては、けっこう細かな所まで描いたという記憶があります。

まあ、人は、全く何もないところから想像するというのは難しいと思います。当時の私も、何か手がかりになるものを探していたのでしょうね。例えば、テレビの未来の世界を描いた番組とか、本とかで見たことが、頭の中に残っていて、今、こんな物があればいいなあという願いが混じって、きっと１枚の未来予想図になったのではないかと思うのです。

これから５０年後の未来は、日本は、三豊市は、詫間町はどうなっていると思いますか？そんなに変わっていないのじゃないかと思う人もいれば、今よりもっともっと便利な社会になっている（空飛ぶ自動車で交通渋滞なし、普通に宇宙旅行している等）とか、案外、昔の生活に戻っているとか・・・。せっかく描いた絵は、できたら保存しておきましょう。５０年後に皆さんがその絵を見た時にどんな気持ちになるか、ちょっと楽しみではないですか？

あこがれ

表の記事で、新児童会役員に立候補したお兄さんやお姉さんに「あこがれの気持ち」を抱いた３年生のことを紹介しました。ちょうどいい機会なので、私のあこがれについて今日はお話しします。

まずは、お掃除です。私が通っていた勝間小学校では、縦割り清掃といって、１年生から６年生までのいろいろな学年の子どもで班を編制して掃除をしていました。詫間小学校も、この前まで、同じような掃除の仕方をしていたので、知っている人も多いと思います。１年生の私は、ある特別教室の掃除当番になりました。音楽室だったか図工室だったか忘れてしまいましたが。６年生のお姉さん、５年生のお兄さんをはじめ、各学年から１人ずつで６人いたと思います。私が、机を持ち上げることができなくて、机を押して運んでいたら、６年生のお姉さんがすぐに来てくれて「よしき君。お姉さんがしてあげる。」といって、重い机を軽々持ち上げて、さっと運んでいきました。「よしき君は、いすを運んでね。」と言われたので、お姉さんがしているように、いすを持ち上げて運びました。お姉さんのすぐ後ろをずっと追いかけて運びました。そうすると「そうよ。持ち上げて運ぶと、ごみをいっしょに運ばないですむでしょ。」と言ってくれて、もう、うれしくて、掃除の時間が待ち遠しくて、このお姉さんの言うことは何でも聞こうと思ってしまいました。これは、まちがいなくあこがれの気持ちでした。そして、その時、ぼくも大きくなったら、あんなお姉さんみたいになりたいと思ったのでした。

次は、登校班のお兄さんにあこがれた話ですが、これについては、絵本にしています。以前に学校便りの裏面に連載しました。（ホームページの「学校便り」→「2020 年 No. 21 号」～）ホームページでもご覧いただけますし、本校の玄関の掲示板（事務室に向かって右側）にも掲示していますので、興味がある方はご覧ください。

そして、３年生の時です。６年生のお兄さんたちが休み時間にドッチボールをしていました。３年生から見ると、見上げる程背の高いお兄さんたちが、ビューンと見えないくらいの速いボールを投げていました。すごい！と思っていたら、そのボールをお腹の所でバシッとキャッチするではありませんか。すごい！かっこいい！と思って見ていました。そうすると、その中の一人（同級生の友達のお兄さん）が、「３年生も一緒にやるか？」とさそってくれました。私たちは、迷わず「うん。」と返事をしました。そのお兄さんは、「でも、手加減はせんよ。当たって泣くなら、はじめからやめとけよ。」と言いました。私を含め、そこには６人くらいの３年生がいましたが、みんな「分かった。入れて！」ということで、その日から毎日、休み時間に、６年生と３年生が混じったドッチボールをすることになりました。もちろん、６年生に狙われると、逃げることは難しいのです。ものすごく強いボールが当たり、とても痛いのですが、泣く子なんて一人もいません。あこがれのお兄さんたちと一緒にドッチボールができることがうれしくてうれしくてたまらなかったのです。ある時、私は、６年生に狙われてしまいました。もう当てられるのは間違いありません。と思った瞬間、黒い大きな影が私の前に現れ、バシッという音がしました。６年生のお兄さんの一人が、私の前に立って守ってくれたのです。そのお兄さんが、私を狙ったボールを、私の前に立ってキャッチしてくれたのです。「かっこいいなあ、ぼくも、あんな６年生のお兄さんみたいになりたいなあ。」と心から思いました。

あこがれは、小学生の時だけではありません。中学でも、高校でも、そして大人になってからもその気持ちはずっともっています。還暦を迎える今でも、その気持ちは少し残っています。教員になって、先輩の授業を見せていただいた時に、あんな風に、子どもの目がキラキラする授業ができる先生になりたいなあ、と先輩教員にあこがれたものです。

私は、子どもたちに、「人は目を向けた方に必ず進んでいくものだ。」と話しています。「あこがれ」や「あんな風になりたい」という思いは、向いた方向＝目標なのだと思います。夢がない、具体的な希望をもっていないという人も、あこがれの人、あんな風になりたいの「あんな」人はいるのではないでしょうか。私は、それが目標であり夢や希望なのだと思うのです。それが途中で変わってしまっても、目標に向いて進んでいこうとする態度や気持ちは残るはずです。そうすると、次の「あこがれ」に向かって人は進んでいくことができるのではないかと思うのです。

富士山

以前、「私は、大学時代に山梨県に住んでいた。」ということをこの「独り言」に書きましたので、知っている方も多いと思います。タイトルの富士山は、ご存じのとおり、山梨県と静岡県にまたがってそびえ立っている日本一の山です。

私が、富士山を初めて見たのは、高校の修学旅行でした。ところが、その時の記憶がありません。感動したような、そうでもなかったような。はっきりと富士山を「すごいな！」と思ったのは、大学に入学した時です。

当時は、瀬戸大橋もかかっていませんでした。高瀬駅を午前８時頃出て、高松まで１時間半。そこから宇高連絡船で１時間。宇野から岡山まで電車で行き、新幹線で岡山から東京へ。東京駅についたのは夕方の４時頃。それから立川駅まで中央線、立川駅から中央本線に乗り換えて大月駅。そこで、富士急行線に乗って谷村（やむら）駅。その駅の近くの下宿（１階が大家さんの自宅でその２階に６人くらいの学生が、それぞれ４畳半の部屋に住んでいる。台所、洗面所、トイレは共同。なんと家賃は月 8,000 円。）に着いたのは夜の８時頃。外の景色は全く見えませんでした。翌朝、台所の窓から富士山が少しだけ見えると先輩に教えられ、のぞいてみたら、あの雄大な富士山の山頂部分が見えたのです。「すごいな！」と思いました。しかし、その感動もつかの間、こんな寒い町で、こんな寂しい町で、こんな田舎（一応「市」だけど、当時の三豊郡高瀬町とあまり変わらない。）で、誰一人知り合いもいない町で４年間も過ごさなければいけないのかという不安と悲しみが押し寄せてきたのです。「毎日、富士山が見えるなんて、こんなすごい場所はないよ。」と、富山県出身の先輩に言われても、「富士山なんてどうでもいいや。東京に住みたい。いや、香川に帰った方がましだ。」とまで思ったのです。

それから４年後。４年前に降り立った駅から、私は香川に向けて旅立ちました。その日の出発も朝の８時頃でした。４年間の月日の流れというのは不思議なものです。その時に、駅のホームから見た富士山の山頂が、ふるさとの景色に思え、寂しさがこみ上げてきました。

富士山は、山梨県ならどこからでも見ることができるわけではありません。私が住んでいた都留市だと、その全ぼうは無理ですが、山頂だけなら見ることができます。都留市から富士山に向かって行くと１０㎞程先に富士吉田市というところがあって、実は、高校の修学旅行で見た富士山は、この富士吉田市にある富士急ハイランドという遊園地からなのですが、ふもとから山頂まで、全ての姿を見ることができるのです。下の写真は、この前、久しぶりに河口湖（富士吉田市の隣）に行ったのですが、その時に湖畔から私が撮った写真です。この日は、湖面に波が立っていましたので、富士山の姿が湖面に映るということはありませんでした。しかし、風がなくて、湖面に波が立っていなければ、富士山の姿が鏡のように湖面に映ります。それが、有名な「逆さ富士」というわけです。

私は、大学生の時に、ちょうどこの写真を撮った場所に近いレストランでアルバイトをしていました。いやというほど見た景色が、なつかしくて愛おしくて、４０年もの月日を経ても、第二のふるさとは、何も変わっていなくて…。

今度、この場所に来ることができるのは、いつだろう？と、決して大学に入学した時には無かった感情にひたった冬の一日の出来事でした。

春は別れの季節　そして出会いの季節

いよいよ明日。卒業式の日がやってきます。皆さんも同じかもしれませんが、私は「別れ」も「出会い」も少し苦手です。理由を簡単に言えば、環境の変化への対応があまり得意ではないからです。「そうは、見えませんけどね。」と、よく言われるのですが、実は、これでもがんばって表面は平気なふりをしているのです。どちらかと言えば「別れ」の方が嫌です。

でも、別れがあるのは出会いがあったからです。誰一人知り合いのいない場所にたった一人で入って行ったとします。それは、不安でたまらないでしょうね。でも、誰かが話しかけてくれて、仲良くなって、いつの間にか、その人と一緒にいるのが楽しくてたまらなくなって。ずっとこのままこの状態が続けばいいのにと思っていたのに、また離ればなれになって…。誰一人知り合いのいない場所にたった一人で入って行って…。それを繰り返すわけです。そんなことは、よく分かっているはずなのに、やっぱり別れは寂しくてたまらないです。

私は、小学校の時にとても仲良しの友達がいました。帰る方向も同じで、家も近かったので、お互いの家によく遊びに行ったものでした。日が暮れて家に帰っても、まだ話がしたくて「有線電話」で電話して、何十分も話をしていて家族に叱られることもよくありました。その友達といると、とても楽しくて心が安定して、その友達と学校で会えるので、明日が来るのが楽しみで仕方ありませんでした。その友達の好きな物やおもちゃは、全部言うことができるくらい仲良しの友達でした。

小学校６年生の３学期になっても、私は、その友達と一緒にいつものように帰っていました。いつもと変わらず、小さな事で大笑いをしながら帰っていました。どんな話だったのかは覚えていませんが、本当に大したことないこと（例えば、近所の犬が自分の尻尾を噛もうとしてぐるぐる回っているんや。おもしろいやろ、ハハハ。）だったと思います。そんな時間が、これからもずっと続くと信じて疑いもしませんでした。ですから、「〇〇君は、中学校で何部に入るん？ぼくも〇〇君と同じ部活にしようかな。」と聞いたのです。その時に、その友達が、少し寂しそうな顔をしました。「どしたん？」と聞くと、「佳樹君は、陸上部入るんやろ、走るの速いから、きっと活躍できるわ。実はな、前から言わないかんと思ってたんやけど、なかなか言えんかった。今日は、思い切って言うわな。ぼくな、高瀬中学には行かんのや。」

あまりにも突然で、あまりにも予期しなかった告白に、私の頭の中は真っ白になりました。「どこに行くん？」と聞くのが精一杯でした。「遠い所の中学校。汽車（電車のこと）に乗って通うことになるんや。」と、友達はつぶやくように答えました。「じゃあ、もうすぐお別れなん？」それっきり二人は無言のまま並んで帰っていきました。

それからしばらく、私たちは、とてもぎこちない関係でした。大好きな友達に裏切られたような気持ちを私がもっていたからです。もしかしたら、人生で初めての「別れ」だったからなのかもしれません。一緒に帰ることもさけていました。本当は、一緒に帰りたいのですが、一緒にいるのがつらくて寂しかったからです。その友達だって、私を裏切ったわけではなくて、私と一緒に中学校に行きたかったのでしょうが、仕方なく遠くの中学校に進学することになったのです。そんなことは分かっていましたが、どうしても受け入れることができなかったのです。

このまま卒業かと思っていたのですが、卒業式の前日、校門の所でその友達は私を待ってくれていたのです。「一緒に帰ろう！」とその友達に言われ、私は「別に、ええよ。」と心の中とは真逆の返事をしてしまいました。本当は、とても一緒に帰りたかったのに。

帰りながら、途中で、道ばたに座って話をしながら、何時間もかけて帰りました。やっぱり、その友達といると楽しいのです。なごりおしいという感情も、この時に初めて経験しました。真っ暗になって家に着き「あんた、明日卒業式やのに、いつまで遊んでるん！」と母親にめちゃくちゃに叱られたことは今でも覚えています。翌日の卒業式で、その友達と話をしたかどうかは忘れてしまいました。でも、卒業式の前の日に、前と同じように、遊びながら帰ったことは、きっと別れの言葉のかわりだったのだと思います。その友達のことが、「なつかしい。」と思えたのは、中学に入って新しい友達ができた頃だったと思います。